

旧三井物産株式会社横浜支店倉庫（日東倉庫日本大通り倉庫）の保存活用を巡る動き

旧三井物産株式会社横浜ビル（明治44年竣工）に併設されている倉庫（明治43年竣工）の取り壊しが現所有者により計画されていることが判明し、平成26年8月5日に保存を考える緊急シンポジウムを開催しました。同倉庫は絹貿易で栄えた横浜で生糸の保管庫としても利用された貴重な歴史的建造物であり、横浜の「歴史を生かしたまちづくり」を推進する上で、要となる歴史的建造物でもあります。シンポジウムを経て参加者の賛同の下、下記のアピール文が出されました。

横浜に残る生糸文化の礎をみんなで守ろう

旧三井物産横浜支店倉庫（明治43年竣工）は、横浜の「歴史を生かしたまちづくり」を推進する上で要となる歴史的建造物であるとともに、日本のシルク遺産として世界遺産になりうる建造物であります。このような世界遺産的価値を有する建造物の取り壊しは、横浜市民としては許すことができません。是非とも次の世代に横浜の宝として守っていくことを決意し、広くアピールします。

（平成26年8月5日）
旧三井物産株式会社横浜支店倉庫の保存を考える緊急シンポジウム 参加者 120名 一同
西和夫（神奈川大学名誉教授・公益社団法人横浜歴史資産調査会 相談役）

吉田 鋼市（横浜国立大学名誉教授）
堀 勇良（建築史家）水沼 淑子（関東学院大学教授）
鈴木 伸治（横浜市立大学教授）
大野 敏（横浜国立大学大学院准教授）
米山 淳一（公益社団法人横浜歴史資産調査会 常務理事・事務局長）



シンポジウムの様子

同倉庫を巡る一連のメディア報道/有志活動等の動き (8月-9月)	
平成26年8月1日	神奈川新聞一面にて解体の報道
同 8月2日	神奈川新聞にて緊急シンポジウムの案内掲載
同 8月4日	ヨコハマ経済新聞にて緊急シンポジウムの案内掲載
同 8月5日	緊急シンポジウム開催 アピール文採択
⇒以降、市内の各市民団体等から所有者に対して保存要望書提出	
同	ヨコハマ経済新聞にてシンポジウム記事掲載
同 8月7日	神奈川新聞にてシンポジウム記事掲載
同	はまれぼ.comにてシンポジウム記事掲載
同 8月8日	有志にて「旧三井物産横浜支店生糸倉庫を壊して欲しくない人々の会」発足（以下：生糸倉庫の会）
同 8月10日	東京新聞にて倉庫に解体に関する記事掲載
同 8月12日	読売新聞にて倉庫に解体に関する記事掲載
同	「生糸倉庫の会」電子署名開始（10時時点で1351筆） URL : http://goo.gl/FISd58
同 8月19日	「生糸倉庫の会」第1回ミーティング
同 8月22日	神奈川新聞社説「同倉庫について掲載」
同	JIAが現所有者と横浜市に保存要望書提出
同 8月23日	「生糸倉庫の会」第1回倉庫周辺のまち歩き開始（※以降定期的開催）
同 8月24日	テレビ朝日 サンデースクランブル「高田道場」にて 当会常務理事米山の同倉庫に関するインタビュー放映
同 8月27日	はまれぼ.comにて同倉庫と設計者の遠藤於菟に関する記事（前篇）掲載
同 9月1日	「生糸倉庫の会」より現所有者と横浜市に要望書提出
同 9月3日	はまれぼ.comにて同倉庫と設計者の遠藤於菟に関する記事（前篇後篇）掲載
同 9月18日	JIA主催「横浜 生糸を守った建築家 「遠藤於菟」を開催
同 9月20日	「生糸倉庫の会」まちかどの近代建築写真展
同 9月27日	【倉庫建築】をテーマに開催
同 9月28日	「明治のシルク遺産 - 旧三井物産横浜支店ビル・倉庫を残す会」発足 隔週でまち歩きレクチャー開催

ヨコハマヘリテイファンドへのご寄付をお願い致します！

ヨコハマヘリテイジでは、横浜をはじめとした国内の歴史的資産の保存活用に向けて、皆様のご寄付をお願いしております。各地に眠っている歴史的資産を地域の宝、日本の宝、世界の宝として、将来に渡り受け継いでいくために、皆様方のお力添えをよろしくお願い申し上げます。

ご寄付を頂いた方には、個人の皆さまには、所得税等の控除に使える免税証明書、法人の皆さまには法人税の控除に使える税額控除証明書を発行致します。また、金額に応じた記念品を贈呈致します。

【1口～9口】(1,000円～9,000円) 下記を1～9セット

- ・都市の記憶 - 横浜の主要歴史的建造物第6版
- ・山手の西洋館 - 外国人居留地の歴史的景観

【10口】(10,000円) 下記を1セット

- ・横浜●開港の舞臺 - 関内街並復元絵圖 (45cm×45cm 長さ：10メートルの絵巻物) 絶版品 60 限定
- ・都市の記憶 - 横浜の主要歴史的建造物第6版
- ・山手の西洋館 - 外国人居留地の歴史的景観



ヨコハマヘリテイジは免税団体です

歴史的資産の保存活用を推進するために、皆様のご寄付をお願いしております。ご寄付を頂いた方には、免税証明証を発行いたします。確定申告の際に、控除となります。

【ヨコハマヘリテイジスタイル 2014 秋号】平成26年10月10日 発行

発行：公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）〒231-0012 神奈川県横浜市中区相生町3-61 泰生ビル405号
tel : 045-651-1730 mail : yh-info@yokohama-heritage.or.jp 編集協力：上村 耕平

【2014 年度 賛助会員の皆様】

いつもご支援をありがとうございます

お菓子を通じて横浜の歴史文化を継承します。 株式会社 三陽物産

公益財団法人 はまぎん産業文化振興財団

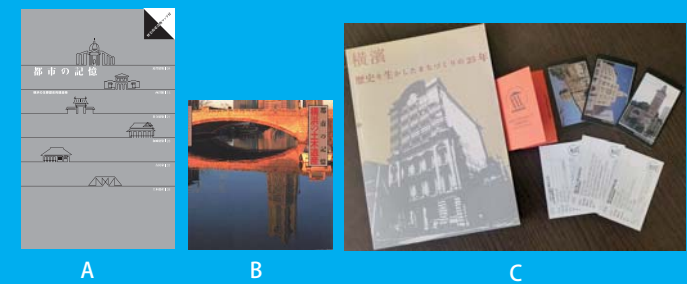
相鉄企業株式会社

横浜市大倉山記念館

ヨコハマヘリテイジ刊行物のご案内

お求めは下記連絡先の事務局までご一報ください。

- A. 都市の記憶 - 横浜の主要歴史的建造物第6版 定価：700円（税込）
- B. 都市の記憶 - 横浜の土木遺産 定価：1,200円（税込）
- C. 横浜の歴史を生かしたまちづくりの25周年 頒布価格：1,500円（関内地区25棟の歴史的建造物のカード付き）



A

B

C

公益社団法人 横浜歴史資産調査会 発行 日々の暮らしと横浜の歴史資産を一步近づける

ヨコハマヘリテイジスタイル

2014 秋号



ベーリック・ホール この西洋館を建てた商人も生糸貿易をおこなっており、生糸貿易の富によって山手を彩った西洋館が建てられたといっても過言ではない

写真：米山 淳一

「歴史を生かしたまちづくり相談室」を開設しました！

公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）では、横浜市と連携し、歴史的建造物の保全活用など歴史を生かしたまちづくりに取り組んできました。近年、歴史的建造物を取り巻く状況は大きく変化し、所有者の抱える悩みも複雑化し、深刻になっています。これらの状況を踏まえ、きめ細やかな所有者支援を行うため、公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）内に「歴史を生かしたまちづくり相談室」を開設しました。主に歴史的建造物の所有者を対象として、専門家や関係活動団体、行政が連携し、具体的な対応策について提案していきます。

【相談方法】

ヨコハマヘリテイジのホームページ上にある必要事項を記入の上、郵送、ファクシミリにより公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）にお申込みください。また、毎週水曜日には電話による相談も受け付けます。

【相談内容の一例】

- ・自宅は古いですが、歴史的価値があるのか分からないので調べてほしい。
- ・歴史的建造物の改修を任せられる腕の良い職人を教えてほしい。

【相談後の対応】

受け付けた相談については、専門家、ヨコハマヘリテイジ事務局員、横浜市都市デザイン室職員等が内容を検討の上、相談内容にお応えします。また必要に応じて、現地確認や詳細のヒアリングなどのため、ヨコハマヘリテイジからアドバイザーを派遣する場合があります。

イベント・展示会のご案内

安川千秋 写真展 YOKOHAMA BAY SIDE 80' s

当会の会員で、横浜の歴史的建造物を長く撮影してこられた安川千秋氏の写真展が開催されています。今回は「YOKOHAMA BAYSIDE 80' s」ということで、新港埠頭（現新港地区）、海岸通、本牧、千若町の、80年代半ばに撮影された作品を中心に展示が行なわれています。

会場の Charan Paulin も歴史的建造物の海岸通番館に入っています。懐かしい横浜の写真を見に是非、足をお運びください。

安川千秋 写真展

YOKOHAMA BAY SIDE 80' s

【会 期】平成26年9月3日（火）～11月3日（月・祝）まで

【会 場】Charan Paulin（チャランポラン）

横浜市中区海岸通1-1 海岸通番館2階

tel.045-651-5881（月曜定休）

みなとみらい線「日本大通り駅A1出口」徒歩3分

象の鼻パーク入口すぐ左側



会場の様子

【特集】横浜から国内の絹文化を繋げる「シルクロード・ネットワーク」

横浜シルク遺産の至宝 旧三井物産横浜支店倉庫

『生糸検査所一覽』(1916年)には、横浜における生糸の到着から、生糸検査を経て、荷造り・船積みまでの様子を示す一連の写真が収録されている。「横浜生糸問屋へ着荷ノ状況」は、弁天通りの某生糸貿易商の店頭を写す。荷馬車に積まれた生糸は、一旦は生糸貿易商店の倉庫に保管される。関東大震災までは、生糸貿易商店ないし商社が、敷地内に自前の生糸保管用倉庫を構えるのが一般的であった。三井物産横浜支店倉庫もそういった生糸貿易商社の生糸倉庫のひとつである。

三井物産横浜支店が、本町4丁目から旧外国人居留地177番地(現日本大通14番地)に進出してきたのは1911年9月のことであるが、倉庫は、日本最初の全鉄筋コンクリート造建築として名高い事務所ビルに先だって建設された。旧横浜居留地177番地は、「横浜」の名の由来とされる、山手の丘裾から東へ長く延びた砂洲の尾根道の中央部、外国人居留地と日本人街の堺に位置し、「日本大通り」が整備された明治初年以降は、横浜屈指の生糸貿易商であったヴァルマル・ショーネ・ミルスム(商会)Valmale, Schone & Milsomが店と生糸倉庫を構えていた、生糸貿易縁りの地である。

三井物産横浜支店倉庫は、1909年11月起工、1910年7月竣工の歴とした<明治建築>である。外周壁と間仕切壁は煉瓦造(正面側の北面には白化粧煉瓦を貼る)であるが、屋根・間内柱・開口部上部の楣を鉄筋コンクリートで造り、一年後の全鉄筋コンクリート造建築の出現を予告する。設計は遠藤於菟で、アメリカ帰りの酒井祐之助が協力している。建築面積は543㎡で、内部を三戸前に分ける。地下室を含めると四層建て、開口部には鉄製防火戸と鉄筋コンクリート製防火戸を備える。生糸保管を考慮して、床は木造とし、煉瓦壁の内側には木板を貼り回す。

三井物産横浜支店の新築時の写真を見ると、正面側(すなわち北面)の2階及び3階の窓に煙突のようなものが取り付けられていることが判る。生糸倉庫に特有な「拝見窓」と呼ばれる散光の採光装置で、生糸の色合い等を精査するための設備である。言い換えれば、「拝見

堀 勇良(建築史家/公益社団法人横浜歴史資産調査会理事)

窓」の存在が、この倉庫を生糸倉庫たらしめている証となる。

遠藤於菟の「大震災前鉄筋コンクリートの経歴」(『日本建築士』1934年11月)は、「此の倉庫は大正十二年の震災には少しも損害を蒙りませんでした。横浜全市を舐め尽したあの猛火の中にあつて、少しの火災をも受けず、完全に耐火の目的を達しました」と伝える。震災当時、1918年建設の第二号倉庫との「二つの倉庫内には生糸及び絹物雑貨等が一杯入つて居た。夫が少しの損害をも蒙らなかつたので当時の価格にして6百萬圓乃至1千萬圓の損失を免れた」とされる。

森本宋の「横濱蠶絲貿易復興裏面史」(『新興の横濱』1924年9月)も、遠藤於菟の言を裏付けるように、「あの猛火の中で不思議に永らへた生糸があるから世の中は不思議なものだ、三井物産横濱支店は金に飽かせて店も倉庫も立派なものであつたが幸に難を逃れたのである、例の鉄筋コンクリートで、当時一千表以上の生糸は這入つて居つたと推測される」と述べる。さらに続けて、「輸出商側たる三井に残つた生糸も非常に貢献する所があつた、第一米国では当分日本から生糸は来まいと思つて大騒動をやらかして居たのだが、其鼻先へ三井物産の第一積出があつたと云ふ報道が早天の雲霓の如く紐育の生糸街を潤した、それは九月下旬の事で、十月中旬には一千五百俵の糸が桑港へ着いた」と、横浜における生糸貿易の復興に際して「三井物産横浜支店倉庫に残つた生糸」が先導的な役割を果たしたことを高く評価している。かくの如く、三井物産横浜支店倉庫は、横浜生糸貿易史の生き証人でもあるわけだ。

旧三井物産横浜支店倉庫は、建造物として重要文化財級の高い歴史的価値、学術的価値を有するのみならず、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産登録を受けて、その充実と展開を図る世界遺産候補「日本のシルク遺産群」の構成要素となるうる資質をも有している。旧三井物産横浜支店<倉庫>建築は、「日本のシルク遺産群」を構想する場合、<横浜>でのシルク遺産としてエントリー可能な唯一の遺産であり、まさにヨコハマヘリテージそのものである。決して喪つてはならない。



旧三井物産株式会社横浜支店事務所棟(手前)と倉庫(奥)

写真:米山淳一



富岡製糸場(世界文化遺産)

写真:米山淳一

生糸がつくった横浜の建築—遠藤於菟の旧三井物産横浜支店ビル・倉庫の魅力

鈴木 智恵子(エッセイスト/公益社団法人日本文芸家協会会員)

遠藤於菟の故郷木曾地方は、木曾五木で知られる林業が盛んな土地だが、養蚕に携わる農家も多かった。山里の農家にとって、養蚕は数少ない現金収入だ。小正月には繭玉飾りを作って、繭がもたらす豊かな収入を祈った。繭玉飾りとは、木の枝に繭の形に丸めた餅や米の粉の団子を刺したもの。横浜の農家でも昭和40年頃までは見られた。日本人には身近だった養蚕も、戦後、化学繊維の発達や中国からの安い生糸の輸入によって廃れ、蚕と共に日々の暮らしが営まれた養蚕農家の建物も失われていった。貧しい日本の近代化を支え続けた生糸を追いやったもの。皮肉なことに、それは豊かな日本を現出させた高度成長による近代化の達成だった。

2014年6月、富岡製糸場と絹産業遺産群が世界遺産に正式登録されたことで、忘れられていた日本の絹産業に再び光が当たるようになった。生糸、養蚕、蚕糸。シルク産業関連の言葉は生糸の港の横浜でこそ生き残っていたが、一般的には死語となりつつあった。生糸貿易港の横浜でフリーアーキテクトとして生きた遠藤於菟にとって、生糸はまさに建築のパトロンだった。生糸貿易のために、商社や倉庫が建てられ、生糸検査所も必要となった。生糸がもたらす豊かな富は、堅牢で贅沢な新しい建築を街中に振り撒いた。三溪園を残した横浜の生糸商原富太郎の商店建築の数々、一連の生糸検査所関係の建築。そして、開港以来の生糸貿易の雄、三井物産の建築。

三井のパトロンを得たことで、遠藤於菟は横浜で日本最初の全鉄筋コンクリート造ビルである三井物産横浜支店ビルを完成させることができた。当時の三井物産には、創立者にして三井グループ全体に君臨する益田孝という大実業家があった。彼の理解なくして、於菟の全鉄筋

コンクリート造の三井物産横浜支店ビルは有り得なかつただろう。益田孝と原三溪は親子ほど歳が離れながら、茶人仲間で親交が深く、共に文化人として名高かった。益田は中央経済界、原は横浜経済界という差はあったものの、一流の実業家にして一流の文化人であった。だからこそ、フリーアーキテクトという日本にはなかつた職能を認め、於菟の建築家としての優れた資質を感じ取り、クライアントとなったのである。そして、資金が潤沢な三井の益田孝は、鉄筋コンクリート造というまだ実験段階の新しい建築技術とそれがもたらす造形に理解を示した。

当時、定期的で開催されていた三井物産支店長諮問会議の会議録を繰ると、三井物産と言えども、生糸輸出は試練と苦難の連続であったことがわかる。明治26(1893)年に政府から払い下げを受けた富岡製糸場も、明治35年には、経営不振により名古屋など他の三ヶ所の製糸場と共に、横浜の原商店に一括売却している。生糸の生産から輸出までを手掛けようとしたのだが、生産の現場からは撤退を余儀なくされたのである。

大正12年(1923年)9月1日11時58分、関東大震災発生。震災後の瓦礫の中で、まるで三井のパトロンを得た幸運に感謝するかのよう、於菟の三井物産横浜支店ビルは立っていた。付属する倉庫の中に保管されていた生糸は無傷で、震災後の三井物産と横浜経済の復興を支えた。一見地味な倉庫建築だが、一部に鉄筋コンクリート造も使用した建築として技術史的価値も高い。何よりも震災後の混迷する横浜経済を救った歴史の生き証人だ。これからも長くここにあって讃えられるべきだと思う。

■横浜から「絹」を辿る旅 長野県岡谷市

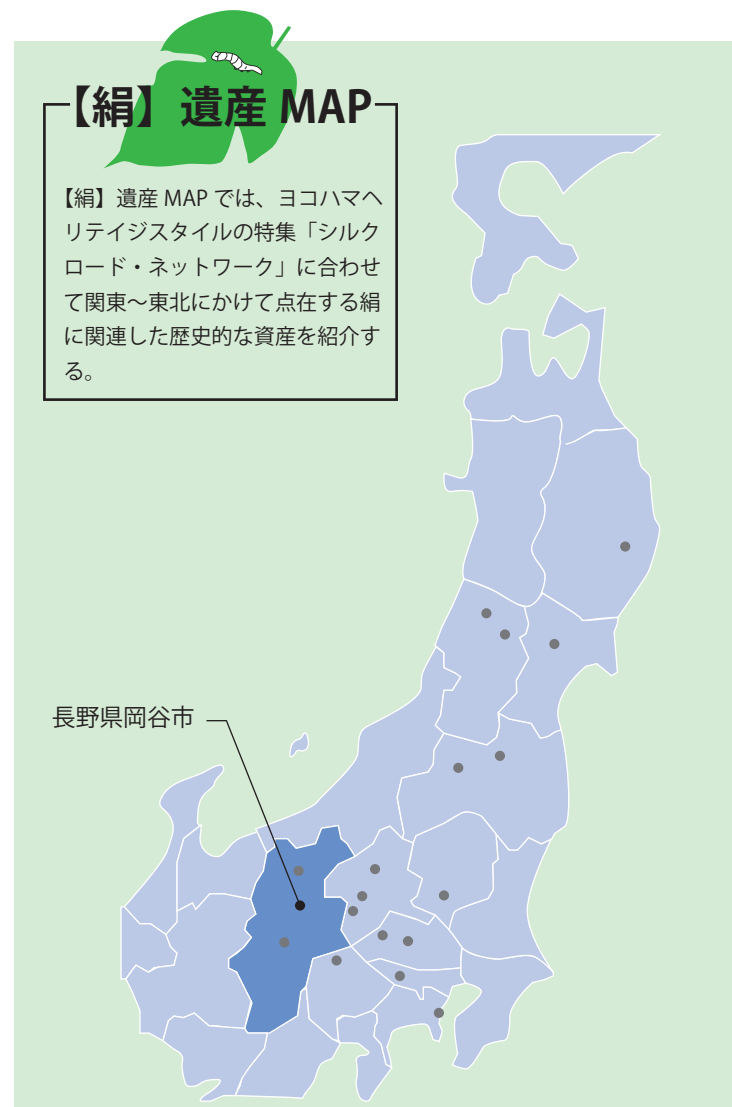
米山淳一(公益社団法人横浜歴史資産調査会常務理事・事務局長)

平成26年9月20日(土)、21日(日)に岡谷市を拠点にNPO法人街、建築、文化再生集団(RAC)主催研究会が開催。当社と連携し来る来年2月21日(土)に横浜で開催する前哨戦で信州シルクの拠点をあえて会場とした。諏訪湖沿岸の岡谷市を中心とした諏訪地方は幕末・明治・大正期を中心に製糸業が栄え横浜との交流が盛んでした。諏訪地方の生糸は当初、和田峠を越え、諏訪地方の製糸家による嘆願で出来た信越本線大屋駅から鉄道で横浜に運ばれました。今の中央本線が諏訪地方に延伸したのは明治39年。横浜への道のりは一気に改善されました。巨万の富をもたらした製糸家の子孫は今でも横浜との絆を先祖から受け継いだ宝として大切にしています。



片倉が市民厚生施設として建築した温泉片倉館(国指定重要文化財)

写真:米山淳一



【絹】遺産MAP

【絹】遺産MAPでは、ヨコハマヘリテージスタイルの特集「シルクロード・ネットワーク」に合わせて関東～東北にかけて点在する絹に関連した歴史的な資産を紹介する。

長野県岡谷市